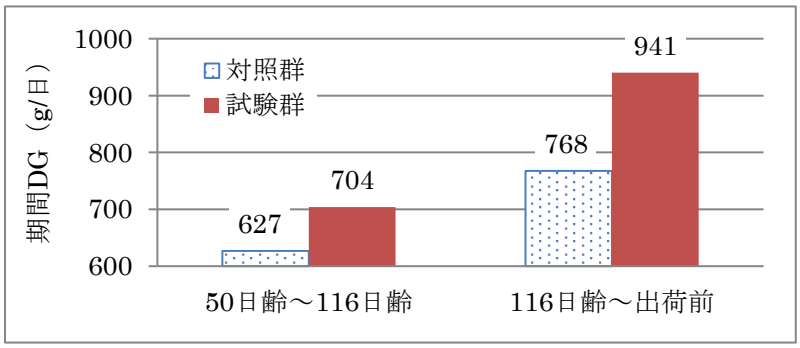
豚インフルエンザワクチンによる肥育成績改善試験

西部家畜保健衛生所　本舘航太朗（もとだてこうたろう）　近藤道代（こんどうまさよ）

【はじめに】豚インフルエンザ（ＳＩ）はＡ型インフルエンザウイルスによる豚の急性呼吸器疾患で、発熱及び食欲減退等の臨床症状を示し、時として細菌の二次感染により発育不良等生産性の低下をもたらすとされている。欧米では豚呼吸器複合病（ＰＲＤＣ）の要因の一つとして重要視されているが、地域での認識はあまり高くない。今般、管内の養豚農場において、肉豚へのＳＩワクチン接種の肥育成績に与える効果について調査したので､その概要を報告する。

【材料及び方法】試験農場は母豚約 650 頭規模の一貫経営農場で、試験群（392 頭）はＳＩワクチンを、対照群（392 頭）は現行の豚胸膜肺炎（ＡＰＰ）ワクチンをそれぞれ 50 及び 80 日齢で接種した。①各群 15 頭について 50、80、110 及び 140 日齢で採血を行い、ＳＩ及びＡＰＰ等の抗体検査を行った。②各群から出荷豚を約 30 頭ずつ抽出し、肺病変（癒着、肺血腫、肺膿瘍等）検査を実施した。③各群の死亡・淘汰頭数、体重（50 及び 116 日齢、出荷前）、出荷日齢及び枝肉重量を調査し、各群の生産成績を算出した。

【結果】①ＳＩ：両群でＨ１Ｎ１亜型（パンデミック株）に対する抗体が陽転した。ＡＰＰ：両群ともに血清型 2 の抗体価が有意に上昇した。豚繁殖・呼吸障害症候群及び豚マイコプラズマ病に対する抗体について、両群に差はなかった。②対照群で間質性肺炎を疑う所見が多く、試験群で胸膜炎及び肺血腫が多く見られた。③両群の死亡率に有意な差はなかったが、試験群は対照群と比較し、期間日増体量の増加（図）及び平均出荷日齢の短縮が認められた。



図．期間日増体量

【考察及びまとめ】試験群において期間日増体量の増加及び平均出荷日齢の短縮が認められ、ＳＩ及びＡＰＰの野外感染がある農場において、ＳＩワクチン使用により生産性が改善される可能性が示唆された。今後は、試験農場のデータ収集及び管内各農場のＳＩ浸潤状況に基づいて、ＳＩによる損失の認識向上を図り、効果的なワクチンプログラムを提案するなど、地域の養豚農場の生産性向上に寄与していきたい。